

系統一機能文法の Transitivity System を 枠組とした源氏物語の3つの英語訳に 見られる観念的意味の差異について¹⁾

東京国際大学 佐々木 真

0. はじめに

我々日本人が「翻訳」と聞いてまず想起するのは外国語から日本語への翻訳であろう。しかし今日外国語、特に英語に翻訳されている日本の書籍が多いことに驚かされる。それは文学、経済、商業、文化一般に関するものから、はては漫画に至るまで多種多様である。このような翻訳の状況は日本経済の目ざましい発展の結果、日本や日本文化に対する関心が高まっているということを反映していると思われる。日本人としてこのように日本の作品が英語やその他の諸外国語を通して外国の人々にも読まれることは喜ばしいことである。なぜなら外国人が日本や日本文化について理解を深め、また一方で我々日本人が外国文化を学ぶことによってよりよいコミュニケーションをはかることができ、不必要な誤解を避けることができると思われるからである。

現在洋書を販売している書店には英語訳された日本の作品が販売されているが、そのような書店で一つ興味深いことに気づく。それは一つの作品に対していくつかの翻訳の種類があるということである。例えば夏目漱石の『ぼっちゃん』は3種類の英語訳があり、『源氏物語』もまた3種類の異なった英語訳がある。このような異なった英語訳を開いてみると一見してそれらが異なった文体であることがわかる。しかしながらそれらがどのように異なっているかを明確にすることは難しい。

そこで本研究では3種類の『源氏物語』の英語訳を比較し、そこに用いられる文体の差異について検討した。ここでは文体の差異として何がどう異なるのか、なぜそのような違いが生じるのか、そのような文体の差異は読者にどのような印象を与え、ひいてはどのような文学的な効果や価値を生むのかについても考察する。

1. データと先行研究

1.1 『源氏物語』とその英語訳

今回比較の対象としたのは『源氏物語』の英語訳である。『源氏物語』は1008年頃から1022年頃にかけて紫式部により書かれ、日本文学の最高傑作の一つに数えられている。作品は天皇の子である源氏の愛の遍歴の物語で、54帖からなる。中学校あるいは高等学校の授業でも扱われることが多く、また日本語での口語訳もいくつかあるために現代でも最も親しみやすい古典作品の一つとなっている。『源氏物語』はまた英語以外の外国語にも翻訳されている²⁾。

『源氏物語』の英語訳は3種類ある。最初のもは日本人の末松兼澄の翻訳によるもので1882年にその英語訳が出版されている。次の英語訳は Arthur Waley によるもので1935年に出版されている。最新の英語訳は Edward Seidensticker によるもので1976年に出版されている。これらの英語訳は全て Tuttle 出版社よりペーパーバックとしても出版されており、本研究ではそれらを使用した³⁾。末松版は Introduction を入れて227頁、Waley 版は全2巻で1,135頁、Seidensticker 版は全2巻で1,090頁とそれぞれなっている。末松版は他の二つの英語訳に比べてページ数が少ないが、これは彼が作品すべてを英語訳したわけではなく、いくつかの章を削除したことに由来する。末松はその Introduction の部分で “In translating I have cut several passages which appeared superfluous, though nothing has been added to the original.” と述べている。

1.2 先行研究

『源氏物語』の英語訳に関しては既にいくつかの比較研究がなされている。Bowring (1988) は Waley 訳と Seidensticker 訳を比較しながら、Waley 訳は状況設定が日本的ではなく、使用されている単語の中に ‘porticoes’, ‘terraces’, ‘sit on chairs’ などという語彙を使用して西洋的なスタイルに場面を変化させていることを指摘している。また Bowring は Seidensticker 訳は原文に限りなく忠実でしかも正確でありスタンダードな翻訳として紫式部のアイロニーをよく伝えているが、Waley 訳は彼自身英語に長けており、日本文学を有名にしたばかりでなく、それ自体が一つの芸術作品になっていると述べている。

Cranston (1978) は Waley 訳と原作に言及しながら Seidensticker の英語訳について述べている。彼は二つの英語訳からいくつかの passages とそこに相当する原文を取りだし、文の長さ、文のリズム、語彙を比較して、Seidensticker

の英語訳が Waley のものに比べて飾り気のない、きびきびした文体であると指摘している。

井上 (1982) は原作に言及しながら Waley の英語訳に関していくつかの間違いを指摘している。井上は Waley の英語訳の間違いは Waley が原作を拡大解釈したせいであるとも示唆している。北村 (1987) もまた Waley と Seidensticker の英語訳を比較して語彙、文構造、パラグラフの観点から二人の英語訳の違いをつぎのように指摘している。

- (1) Seidensticker は原作の単語を一般的な英単語に置き換えているが、Waley は自ら作り出した単語を使用している。
- (2) Waley は一般動詞を主に使用し、Seidensticker は be 動詞を主に使う。
- (3) Waley は重文、副文、を多用するが、Seidensticker は殆ど単文である。
- (4) Waley は長いパラグラフで物語の流れを継続的に表現しているが、Seidensticker は一つの出来事、行動を一つのパラグラフにする。

このような先行研究は Waley 訳と Seidensticker 訳を主に取り扱ったものであり、末松訳を取り入れて 3 種類を同等に扱うものはない。これは末松訳が『源氏物語』をすべて翻訳していない、いわば不完全な英語訳であるためである。しかしながら、末松訳も不完全とはいえ『源氏物語』の英語訳版として存在し容易に入手可能である以上やはり比較するに価すると思われる。そこでこの研究では 3 種類の英語訳よりそれぞれ『源氏物語』の最初の章である「桐壺」を全て抜きだし、その文体の比較をした。この章をデータとして取り上げた理由は、削除された部分のある末松訳でも小説の冒頭を削除したりはせず、3 種類の訳で必ず存在する章だからである。

2. 分析の枠組

2.1 Transitivity System

本研究では分析の枠組として Systemic-functional Grammar の Transitivity system (Berry 1975; Halliday 1985) を適用した。これは Systemic-functional Grammar の理論で考える 3 つのメタ機能 (metafunctions), すなわち Ideational metafunction, Interpersonal metafunction, Textual metafunction の中の Ideational metafunction にもっとも関連するものである。Ideational metafunction とは我々が自分たちの経験をどのように言語化するかといったことに関しており、行動 (action), 出来事 (event), 意識 (consciousness), 関

係 (relations) などの process を表現する機能である。

この process の表現は 3 つのコンポーネントからなる。第 1 は process 自体であり、これは動詞を中心とする verbal group で表現される。第 2 は process の participant で、process に関わる人間や物事を指し nominal group で表現される。第 3 は process に伴う circumstance である。これは process に関する時間や場所、または状況といったものを示すもので、adverbial group で表現される。

Ex. 1 Michael broke the window by accident.

上記の例では broke が process であり、その行為者である Michael と行為を受けた window がそれぞれ participant となっている。また最後の by accident はその process の状況を示しており、circumstance として機能している。この例では broke が「壊した」という物理的な process を示しているが、process にはまだ他にも次のようなものがある。

Ex. 2 I saw John yesterday.

Ex. 3 This computer is quite expensive.

上記の二つの例ではいずれも先の broke と同様の物理的な process と捉えることはできない。Ex. 2 の saw は「見た」というむしろ心理的な process (mental process) として考えられる。また Ex. 3 の is は物理的・心理的なもののいずれでもなく This computer と quite expensive を関係づける process (relational process) と考えることができる。このように process にはいくつかの種類がある。

同様に participant や circumstance も process に伴い機能が異なる。Ex. 1 と Ex. 2 では Michael と I がそれぞれ行為者として機能しているのに対して、window と John は行為の対象として機能している。また Ex. 3 では This computer も quite expensive のどちらも行為者とその行為を受ける対象という関係ではない。さらに circumstance では Ex. 1 の by accident が process の「理由」として機能しているのに対して、Ex. 2 の yesterday は process の「時間」を表している。

Transitivity system とはこのような process の種類とその選択であり、さ

らにはそれらの process がどのような participant や circumstance をとるかということを示しながら、その表現される構造も特定する。換言すればこの system を通じてどのような participant がどのような process で表現され、さらにはどのような circumstance がそこに伴われるかが決まるのである。

2.2 Process の種類

Transitivity system (Halliday 1985) では6つの process が存在する。以下、それらの種類とその process に伴う participant について例を挙げながら述べていく。

2.2.1 Material Process

Material process とは「誰かが何かをした」とか、「何かが起きた」ということを伝えるもので、Actor, Goal という participant を伴う。Actor は行為、すなわち process の動作主を示し、また Goal はその行為のおよび対象である。以下の二つの例では John, Michael がそれぞれ Actor で、the window が Goal になっている。

Ex. 4 John broke the window by accident.
 ACTOR PROCESS GOAL

Ex. 5 Michael fell down.
 ACTOR PROCESS

2.2.2 Mental Process

Mental process とは「感じる」、「考える」、「見る」といった心理的なもので、その participant としては Senser と Phenomenon がある。Senser とは感じたり、考えたりする意識のあるものを指し、一方の Phenomenon は感じられることや考えられたり、見られる物事を示す。またこの process は Perception, Affection, Cognition の3種類のタイプに下位分類することができる。Perception とは「見る」、「聞く」、「臭いを感じる」という体の五感で感じることであり、Affection とは「好き」、「嫌い」、「恐い」といった感情によるものである。また Cognition とは「考える」、「理解する」、「知っている」という認知的なもののことである。これらを例示すると以下のようになる。

Ex. 6 I saw Mary. yesterday.
 SENSER PROCESS: PERCEPTION PHENOMENON

Ex. 7 John loves Mary.
 SENSER PROCESS: AFFECTION PHENOMENON

Ex. 8 I believe you.
 SENSER PROCESS: COGNITION PHENOMENON

2.2.3 Relational Process

Relational process とは「何かがある関係の状態にある」という、いわば‘being’ という process である。この process もまた Intensive, Circumstantial, Possessive という 3 種類のタイプに下位分類される。Intensive は「何かがある状態である」ということを示し ‘*x is a*’ というかたちで表現される。Circumstantial は「何かがある場所・状況にある」ということで ‘*x is at a*’ のようなかたちで表される。また Possessive は所有を示し, ‘*x has a*’ のかたちで表現される。

また relational process は Attribute mode か Identifying mode のどちらかによって具現される。Attribute mode とは「*a* が *x* の性質や属性を示す」というもので、Identifying mode とは「*a* が *x* と同一なもの (identity) を示す」ものである。この二つの mode の違いは Identifying mode では ‘*x is a/a is x*’ のように *a* と *x* の順序を逆にすることができるが、Attribute mode ではそれができないということである。

この process の participant は上記の二つの mode のどれかによる。Attribute mode の場合、participant は Carrier と Attribute になる。Carrier とはある物・人・事柄などであり、Attribute は Carrier の性質・状況・所有物などを表す。

Ex. 9 Tom is my brother.
 CARRIER PROCESS: INTENSIVE ATTRIBUTE

Ex. 10 The festival is on Friday.
 CARRIER PROCESS: CIRCUMSTANTIAL ATTRIBUTE

Ex. 11 I have a computer.
 CARRIER PROCESS: POSSESSIVE ATTRIBUTE

また Identifying mode の場合、participant は Identified と Identifier となる。Identified とは象徴 (token)・現象・所有者などであり、Identifier とは価値・時間や場所・所有物などを表す。

Ex. 12 John is the prime minister.
 IDENTIFIED PROCESS: INTENSIVE IDENTIFIER

Ex. 13 Tomorrow is the 13th.
 IDENTIFIED PROCESS: CIRCUMSTANTIAL IDENTIFIER

Ex. 14 Michael owns the computer.
 IDENTIFIED PROCESS: POSSESSIVE IDENTIFIER

2.2.4 Behavioural Process

Behavioural process は material process と mental process の中間的なもので、「呼吸をする」、「夢を見る」、「凝視する」、「笑う」、「泣く」などといった物理的であり、なおかつ心理的なことが表現される。この process は意識のあるものに関してのみ用いられ、その participant は唯一 Behaver だけである。

Ex. 15 The child is crying.
 BEHAVER PROCESS

2.2.5 Verbal Process

Verbal process は「述べる」、「言う」、「告げる」など言葉として表現することで、その participant としては Sayer, Quoted, Reported がある。Sayer は何らかのメッセージを発信するものであり、Quoted と Reported はそれぞれ告げられたり、述べられたりするメッセージのことである。Quoted と Reported の差異は前者が直接引用されているのに対して後者が間接的に伝えられていることである。

Ex. 16 John said, 'I am happy.'
 SAYER PROCESS QUOTED

Ex. 17 John said, that he was happy.
 SAYER PROCESS REPORTED

またこの process には Receiver と Verbiage という participant も存在する。Receiver は告げられたり述べられたりしたメッセージを受け取る人や対象であり、Verbiage とは実際に言葉にされること自体のことである。

Ex. 18 He told me the way to the station.
 SAYER PROCESS: VERBAL RECEIVER VERBIAGE

2.2.6 Existential Process

Existential process は「何かが存在する」、「ある出来事がある」ということを表現し、その participant は Existent である。Existent はもし存在するのが物体や人ならば Entity, そしてそれが何かしらの出来事である場合には Event として機能する。

Ex. 19 There is a book on the desk.
 PROCESS: EXISTENTIAL EXISTENT: ENTITY

Ex. 20 There was a terrific accident.
 PROCESS: EXISTENTIAL EXISTENT: EVENT

以上、Transitivity system における 6 種類の process と、その下位タイプについて図示すると次のようになる。

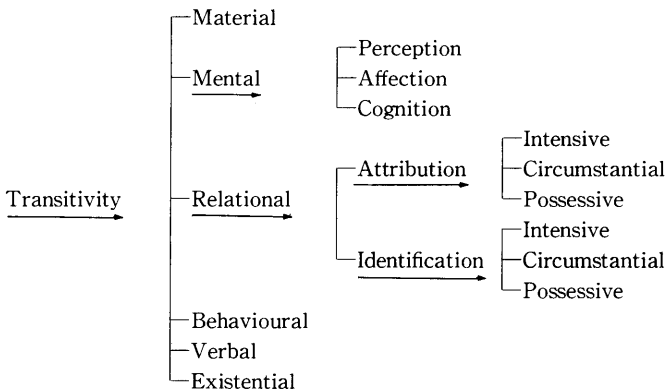


Figure 1: The system of transitivity

3. 分析の方法

3.1 データの process と participant の同定

分析は 3 種類の英語訳からそれぞれ「桐壺」の章を取りだし、そこに現れる全ての clause に対して material process, mental process, relational process, verbal process, behavioural process, そして existential process のうちのいずれ

れかを同定し、同時にその process に現れる participant を同定した。尚、その他の要素である circumstantial elements は今回は分析の対象から除外し、process の理解に対して重要な位置を占める場合にのみ考慮した。分析の具体例は次にあげる Ex. 21 の通りである。

Ex. 21

In the reign of a certain Emperor, whose name/ is/ unknown/ to us, there
 CARRIER P: REL: INT ATTRIBUTE
was/ among the Niogo and Koyi of the Imperial Court, one who/
 P: EXIS: ENTITY SENSER
 EXIS: ENTITY
 though she/ was not/ of high birth/ enjoyed/ the full tide or Royal favor./
 CARRIER P: REL: CIR ATTRIBUTE P: MEN: AFF PHENOMENON

Ex. 21 にあるように process と participant をすべて / という枠でくくり、その下に process や participant の名前を記した⁴⁾。

3.2 二つのアプローチ

具体的な分析としては二つのアプローチを試みた。第一は統計的なもので、同定した process の数を比較した。この方法では各翻訳者のテキストにおける全部の process 数及び6種類の個々の process 数を比較し、そこに統計的な有意差があるか否かを調べた。また mental process, relational process に関してはそれぞれの下位タイプの数も比較した。さらに participant にも着目し、その種類と数を比較した。

さらに第二のアプローチとしては、統計的作業に現れないものに着目した。すなわち、ある process の使用されている環境、または特定の process の用いられ方、さらに process とそこに用いられている participant の関係について比較検討した。この方法では翻訳者に特定の process の用い方に関して特徴があるか、さらには特定の process における participant の使い方に特徴があるかなどを検討し、記述した。

2. 分析と考察

4.1 Process の総数

まず最初の分析として process の総数、及び各 process の数を比較し、それらを X^2 検定にかけた。各翻訳者の process 数は次の Table 1 の通りである。

Table 1 The number of processes among the three translations of *The Tale of Genji*

	Suematsu	Waley	Seidensticker	$X^2(\phi=2)$
Material	281	321	293	$X^2=1.58$
Mental	137	199	177	$X^2=2.70$
Relational	227	249	293	$X^2=5.60(P<0.1)$
Verbal	88	103	84	$X^2=1.87$
Behavioural	19	40	23	$X^2=6.11(P<0.05)$
Existential	26	28	33	$X^2=0.59$
TOTAL	778	940	903	

Table 1 の比較では、末松のプロセス数が他の二つに比べて少ないことが着目される。末松と Waley の差は162あり、末松と Seidensticker との差も125ある。しかしながら Waley と Seidensticker との差は37にすぎない。つまり末松と Waley との差は Waley と Seidensticker との差の4.3倍であり、末松と Seidensticker との差は Waley と Seidensticker との3.4倍になっている。

それではなぜこのように process の総数に差が現れたのであろうか。その原因としては末松が翻訳する際にいくつかの部分削除をしたということが考えられる。これについては先に引用したように末松は自らの翻訳に関しては削除があることを述べており、また彼は原作54帖のうち17帖しか翻訳していないことでもあきらかである。「桐壺」においても末松はいくつかの場面を削除している。次の Ex. 22, Ex. 23, Ex. 24 は原文で同じ場面に相当する箇所をそれぞれの英語訳から抜いたものである。

Ex. 22 (Suematsu's translation)

"In due course, and in consequence, we may suppose, of the Divine blessing on the sincerity of their affection, a jewel of a little prince was born to her. The first prince who had been born to the Emperor was the child of Koki-den-Niogo, the daughter of the Udaijin (a great officer of State). Not only was he first in point of age, but his influence on his mother's side was so great that public opinion had almost unanimously fixed upon him as heir-apparent. Of this the Emperor was fully conscious, and he only regarded the new-born child with that affection which one lavished on a domestic favorite. Nevertheless, the mother of the first prince had, not unnaturally, a foreboding that unless matters were managed adroitly her child might be superseded by the younger one. She, we may observe, had been established at Court before any other lady, and had more children than one. The Emperor, therefore, was obliged to treat her with due respect, and reproaches

from her always affected him more keenly than those of any others.”

Ex. 23 (Waley's translation)

“In due time she bore him a little Prince who, perhaps because in some previous life a close bond had joined them, turned out as fine and likely a man-child as well might be in all the land. The Emperor could hardly contain himself during the days of waiting. But when, at the earliest possible moment, the child was presented at Court, he saw that rumour had not exaggerated its beauty. His eldest born prince was the son of Lady Kokiden, the daughter of the Minister of the Right, and this child was treated by all with the respect due to an undoubted Heir Apparent. But he was not so fine a child as the new prince ; moreover the Emperor's great affection for the new child's mother made him feel the boy to be in a peculiar sense his own possession. Unfortunately she as not of the same rank as the courtiers who waited upon him in the Upper Palace, so that despite his love for her, and though she wore all the airs of a great lady, it was not without considerable qualms that he now made it his practice to have her by him not only when there was to be some entertainment, but even when any business of importance was afoot. Sometimes indeed he would keep her when he woke in the morning, not letting her go back to her lodging, so that willy-nilly she acted the part of a Lady-in-Perpetual-Attendance.

Seeing all this, Lady Kokiden began to fear that the new prince, for whom the Emperor seemed to have so marked a preference, would if she did not take care soon be promoted to the Eastern Palace. But she had, after all, priority over her rival ; the Emperor had loved her devotedly and she had borne him princes. It was even now chiefly the fear of her reproached that made him uneasy about his new way of life.”

Ex. 24 (Seidensticker's translation)

“It may have been because of a bond in a former life that she bore the emperor a beautiful son, a jewel beyond compare. The emperor was in a fever of impatience to see child, still with the mother's family ; and when, on the earliest day possible, he was brought to court, he did indeed prove to be a most marvelous babe. The emperor's eldest son was the grandson of the Minister of the Right. The world assumed that with this powerful support he would one day be named crown prince ; but the new child was far more beautiful. On public occasions the emperor continued to favor his eldest son. The new child was a private treasure, so to speak, on which to lavish uninhibited affection.

The mother was not of such a low rank as to attend upon the emperor's personal needs. In the general view she belonged to the upper classes. He insisted on having her always beside him, however, and on nights when there was music or other entertainment he would require that she be present. Sometimes the two of them would sleep late, and even after they had risen he would not let her go. Because of his unreasonable demands she was widely held to have fallen into immoderate habits out of keeping with her rank.

With the birth of the son, it became yet clearer that she was the emperor's favorite. The mother of the eldest son began to feel uneasy. If she did not manage carefully, she

might see the new son designated crown prince. She had come to court before the emperor's other ladies, she had once been favored over the others, and she had borne several of his children. However much her complaining might trouble and annoy him, she was one lady whom he could not ignore."

これらは源氏の生誕と彼の容姿、源氏に対する天皇の寵愛ぶり、そして一の御子とその母である引徽殿女御の源氏に対する懸念を語っている。しかしながら、この三つの例を比べてみると、末松訳に二箇所削除があることに気づく、最初の削除場面は天皇が源氏に会いたい気持ちを述べた箇所である。Waley と Seidensticker は源氏が生まれた後に天皇が源氏に会いたい気持ち、すなわち、『「いつしか」ところもとながらせ給ひて、いそぎ参らせて、ご覧するに、珍かなる、稚児の御かたちなり』というところをそれぞれ次のように訳している。

Waley : "The Emperor could hardly contain himself during the days of waiting. But when, at the earliest possible moment, the child was presented at Court, he saw that rumour had not exaggerated its beauty."

Seidensticker : "The emperor was in a fever of impatience to see the child, still with the mother's family ; and when, on the earliest day possible, he was brought to court, he did indeed prove to be a most marvelous babe.

しかし末松の訳にはこれに相当する英語訳がない。第二の削除は源氏の母である桐壺更衣の階級と天皇の寵愛ぶりを示す箇所である。原作での『母君、はじめより、おしなべての上宮仕へし給ふべ際にはあらざりき。おぼえ、いとやむごとなく、上衆めかしけれど、わりなくまつはさせ給ふあまりに、さるべき御遊びの折々、何事にも、故ある、ことのふしぶしには、まづ、おう登らせ給ひ、ある時には、大殿ごもり過ぐして、やがてさぶらはせ給ひなど、あながちに、お前さらず、もてなさせ給ひし程に、おのづから、かろき方にも見えしを、この御子生まれ給ひて後は、いと心ことに、おもほしおきてたれば』の部分に関して、Waley と Seidensticker はそれぞれ次のように英語訳している。

Waley : "Unfortunately she was not of the same rank as the courtiers who waited upon him in the Upper Palace, so that despite his love for her, and though she wore all the airs of a great lady, it was not

without considerable qualms that he now made it his practice to have her by him not only when there was to be some entertainment, but even when any business of importance was afoot. Sometimes indeed he would keep her when he woke in the morning, not letting her go back to her lodging, so that willy-nilly she acted the part of a Lady-in-Perpetual-Attendance.

Seidensticker: “The mother was not of such a low rank as to attend upon the emperor’s personal needs. In the general view she belonged to the upper classes. He insisted on having her always beside him, however, and on nights when there was music or other entertainment he would require that she be present. Sometimes the two of them would sleep late, and even after they had risen he would not let her go. Because of his unreasonable demands she was widely held to have fallen into immoderate habits out of keeping with her rank. With the birth of the son, it became yet clearer that she was the emperor’s favorite.”

しかし末松の訳にはこれに相当する英語訳がない。末松のこの部分における二箇所の削除は process の数にも反映されている。

Table 2 The number of processes of three examples, Ex. 22, Ex. 23, Ex. 24.

Ex. 22 (Suematsu)	Ex. 23 (Waley)	Ex. 24(Seidensticker)
18 processes	33 processes	36 processes

Table 2 は Ex. 22, Ex. 23, Ex. 24 の process の総数を示したもののだが、これによると Waley と Seidensticker の差はわずかに 3 であるのに対して、末松の process 数は Seidensticker の丁度半分になっている。

Table 1 の process の総数は、したがって、翻訳者が原文をどれくらい翻訳したか、換言すればその翻訳をどのように編集したのかを示していると言えよう。そしてまた同時にこの process の総数はある意味で 3 種類の翻訳の文学的価値を示しているとも考えられる。すなわち、末松の翻訳版は削除の多き故に Waley や Seidensticker の翻訳版にくらべるとその評価が低くなってしまふのである。北村 (1987) はその英語訳の比較研究から末松の版を除いた理由として末松の版がその削除のために翻訳としては不安全なものであるということを挙げている。

次に Table 1 では relational process と behavioural process の数に関して差が認められる。relational process は $P < 0.1$ で、behavioural process は $P < 0.05$ で統計的な有意差が認められる。すなわちこの表によると Seidensticker が他の二人の翻訳者に比べてより多くの relational process を用いており、また Waley は他の二人の翻訳者に比べてより多くの behavioural process を用いていることがわかる。この二つの統計的有意差は特に Waley 訳と Seidensticker 訳との比較という観点から興味深いことと考えられる。なぜならこの二つの訳は源氏物語の完訳であるのかかわらず、明らかにこの relational process と behavioural process の使用頻度に差異があるからである。

まず relational process の差について北村 (1987) は、異なった観点から指摘している。同氏は Seidensticker は 'be' 動詞を多く使用し、一方 Waley は一般動詞を使用する傾向にあると述べている。しかしこれを本研究の process の概念で換言すれば、Seidensticker は他の二人の翻訳者が material process や mental process といった process を用いている箇所に relational process を用いているということになり、これがその relational process の多さの理由と考えることが出来る。

この relational process の多用はまた、ある種の文体的な特徴をもたらす。北村 (1987) ならびに Cranston (1978) は Seidensticker の翻訳が Waley の翻訳に比べるときびきびした簡潔な文章になっていると指摘しているが。これは Seidensticker が動詞ではなく、文章表現に果たす名詞の役割を重視し、一語一語に文の内容が凝縮され、それだけ一つの単語のもつインパクトが強くなっているからである。換言すれば、Seidensticker の英語訳の特徴は relational process の Carrier, Attribute, Identifier, Identified, といった participant に焦点をあてた文体となっていることと捉えることができるであろう。

つぎに behavioural process に関しては、Waley が他の二人の翻訳者に比べてより多くこの process を使用している。このことは Waley が登場人物の心理的行動に焦点を当てている箇所がいくつかあるということ想起させる。実は後で例示するが、Waley の behavioural process は主に天皇の行動に関して使用されるという一つの方向性が認められるのである。このことは Seidensticker が動詞ではなく Carrier や Attribute などを重視した文体であるのとは対照的に Waley が process を伝える動詞を重視した文体であることを示すものと捉えることが出来るであろう。

4.2. 6種類の各 process

4.2.1 Material Process

Material process は何か・誰かが何かの行為を行うということを示している。ここでは material process の用い方に何かしらの違いがあるかどうかを見てみるために participant の一つである Actor に着目してみた。ここでは便宜的に Actor を +human と -human とに分類し、その種類と数を比較してみた。+human とは源氏や天皇といった人間を指し、-human とは風や虫などのような人間以外のものを指す。

Table 3 The frequencies of Actor

	Suematsu	Waley	Seidensticker	$X^2 (\phi=2)$
+Human	131	145	142	$X^2=0.64$
-Human	37	57	51	$X^2=1.81$
TOTAL	168	202	193	

Table 3 はその Actor の数であるが、ここには何の統計的に有意な差異は認められない。次に +human と -human の種類についてみると、+human の Actor の種類とその頻度に関して一つだけ統計的に有意な差異が認められた ($P<0.1$)。それは天皇 (Emperor) についてである。

Table 4 The varieties and frequencies of human Actor

	Suematsu	Waley	Seidensticker	$X^2 (\phi=2)$
Emperor	30	23	39	$X^2=4.63 (P<0.1)$
Genji	19	26	19	$X^2=1.19$
Kiritsubo	11	19	22	$X^2=3.0$
Mother of Kiritsubo	15	15	12	$X^2=0.59$
Myobu	13	14	12	$X^2=0.91$
Fujitsubo	5	2	3	$X^2=1.67$
Others	38	46	35	$X^2=1.51$
TOTAL	131	145	142	

Table 4 によると Waley が他の二人の翻訳者に比べて明かに天皇を material process の Actor として用いる頻度が少ない。これは末松と Seidensticker が天皇について material process で表現してある箇所を Waley が material process ではなく、behavioural process で表現していることに起因している。

つぎに material process の使用法に関して興味深い差異が認められた。本来 material process は何かの行動や行為、または出来事をあらわす process であるが、Waley と末松の英語訳にはこの process を用いて心理状態・心理描写を表現する場合がみられる。これは、Actor や Goal に人や生き物ではなく、「よろこび (pleasure)」、「悲しみ (sorrow)」、「恨み (resentment)」といった心理状態に関する抽象名詞を用いることによって表現している。

Ex. 25 (Waley's translation)

For sounds and sights / reached / her but faintly,
 ACTOR P: MAT RANGE

Ex. 26 (Waley's translation)

At the sound of the wind / that / binds / the cold dew / on Takagi moor,
 ACTOR P: MAT GOAL
 QUOTED
my heart / goes out / to the tender lilac stems.'
 ACTOR P: MAT

Ex. 25, Ex. 26, では Actor がそれぞれ sounds and sights, my heart となっており、「音や光景が達する」とか「心が行く」のように一種の比喩表現とも形式になっている。しかし、Actor や process が通常の material process のような行為者や具体的な行為を示すものであっても、次の例のように心理状態を表現するのに用いられる場合が末松の英語訳のなかに見られる。

Ex. 27 (Suematsu's translation)

“The Emperor / commanded / me / to say /
 INITIATOR P: VERB SAYER
 QUOTED
 that for some tuime / he / had wandered / in his facy.”
 ACTOR P: MAT CIRCUMSTANTIAL: LOCATION
 REPORTED 1

Ex. 27 では he が Actor として, had wander が process として機能している。ここまでは「彼がさまよう」ということで特に心理的な状態を伝えてはいない。しかし次にくる circumstantial elements に in his fancy とつくことにより, 全体の意味が「幻想の中をさまよう」となってやはり心理状態をあらわす一種の比喩表現となる。このように特定の Actor や circumstantial elements をつけることにより心理的描写を修辭的に material process を用いて表現することが出来るが, Waley に 8 例, 末松には Ex. 27 の 1 例だけこのような使用例が見られた。しかしながら Seidensticker の英語訳にはそのような例は見られなかった。統計的な比較では表出しないが, この修辭的な material process の使用が Waley 訳の文体的特徴の一つと考えられるであろう。

4.2.2 Mental Process

Mental process は Affection, Gognition, Perception の三つの下位タイプに分けられる。Table 6 はそれぞれの翻訳版における mental process の下位タイプの頻度と mental process 全体の数に占める割合を示したものである。

Table 5 The ratio of the three types of mental process

	Suematsu	Waley	Seidensticker
Affection	41/134(29.9%)	67/197(32.8%)	58/177(32.9%)
Cognition	64/134(47.0%)	89/197(46.0%)	88/177(49.7%)
Perception	29/134(23.1%)	41/197(21.2%)	31/177(17.3%)
TOTAL	134	197	177

Table 5 によるとそれぞれの翻訳版で Affection type が約30%, Cognition type が約50%, そして Perception type が約20%となっており, 割合に関しては顕著な差がない。しかしこの process では Cognition type における Phenomenon 用いられ方に差異が認められた。末松はこのタイプの mental process において Phenomenon に引用形 (Verbal process である Quoted) を用いているのである。

Ex. 28 (Suematsu's translation)

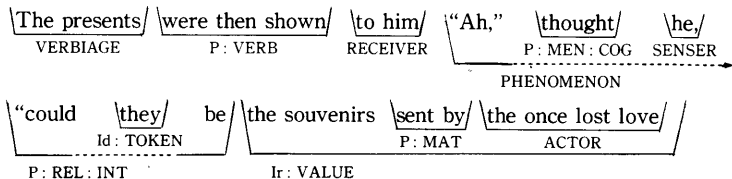
each one of whom / had always been thinking / “ I / shall be / the one , ”

SENSER P: MEN: COG Id: TOKEN P: REL: INT Ir: VALUE

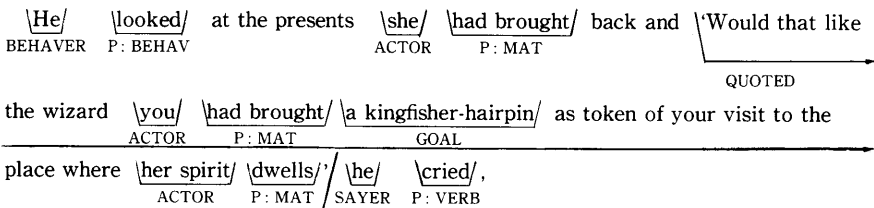
PHENOMENON

Ex. 28 では末松は間接話法の *She should be the one.* というかたちではなく、直接話法の “*I shall be the one*” という形を Phenomenon として用いている。末松がこのような直接話法の引用形を mental process の Phenomenon として使用するの、Senser の心の奥底の感情や欲望を表現する場合である。次の Ex. 29, Ex. 30, Ex. 31 は同一の場面から抜いたものである。これは天皇が桐壺の母が天皇からの使者である命婦にたくした桐壺の形見を見て、それについて思いを巡らす場面である。

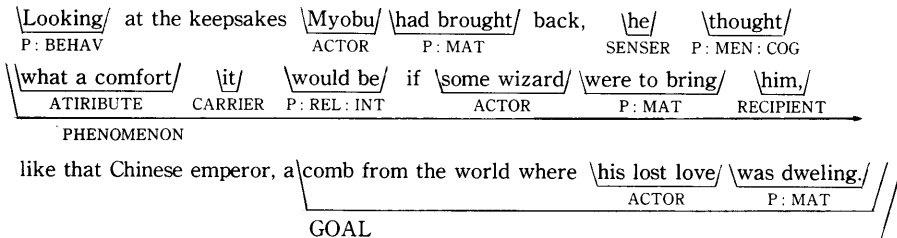
Ex. 29 (Suematsu's translation)



Ex. 30 (Waley's translation)



Ex. 31 (Seidensticker's translation)



Ex. 29 の末松訳では天皇の願望が mental process の Cognition type で述べられ、その Phenomenon は引用形になっている。しかし Waley は同じ場面を mental process ではなく、verbal process として表現し、天皇の願望を同様に引用形で表現している。また一方、Seidensticker は末松と同様に mental process

の Cognition type を使用しているが, Phenomenon に引用形を用いてはいない。

末松がこのように mental process の Cognition type の Phenomenon に引用形を用いているのは, 彼が登場人物の考えることをまるでそれをその人物が頭のなかでつぶやいているように表現しようと試みたからであろう。そういった意味で考えると末松は mental process の Cognition type を心の中の verbal process として用いているとも言えよう。

4.2.3 Relational process

Relational process は Intensive, Circumstantial, Possessive のそれぞれのタイプに分けられる。Table 6 はそれぞれの翻訳版における relational process の下位タイプの頻度と relational process 全体の数に占める割合を示したものであるがその割合に関しては顕著な差は認められない。

Table 6 The ratio of the sub-types of relational process

	Snematsu	Waley	Seidensticker
Intensive	155/227 (68.3%)	172/249 (69.1%)	189/293 (64.5%)
Circumstantial	51/227 (22.5%)	54/249 (21.7%)	68/293 (23.2%)
Possessive	21/227 (9.3%)	23/249 (9.3%)	36/293 (12.3%)
TOTAL	227	249	293

この relational process では先に述べたように Seidensticker が他の二人の翻訳者と比較してより多くの relational process を使用していることが注目し得るが, その理由としては Seidensticker がこの process を他の二人が使用しない場所に用いることが挙げられる。次の Ex. 32, Ex. 33, Ex. 34, はそれぞれ天皇が第一子を見るたびに源氏のことを考えてしまうというシーンである。Waley と末松はそれぞれ mental process を使用しているが, Seidensticker はここで relational process を使用している。

Ex. 32 (Seidensticker's translation)

The emperor's thoughts/ were/ on his youngest son/ even when he/
 CARRIER P: REL: CIR ATTRIBUTE CARRIER
was/ with his eldest./
 P: REL: CIR ATTRIBUTE

Ex. 33 (Suematsu's translation)

The Emperor / who, when he, saw / the first Prince,
 CARRIER SENSER SENSER P: MEN: PER PHENOMENON
could not refrain from thinking / of the younger one, became / more thoughtful than ever ;
 P: MEN: COG PHENOMENON P: REL: INT ATTRIBUTE

Ex. 34 (Waley's translation)

He / did indeed sometimes see / Kokiden's son, the first-born prince, But this only
 SENSER P: MEN: PER PHENOMENON INDUCER
made him / long the more to see / the dead lady's child
 P: MEN: PER SENSER PHENOMENON

ここでは末松と Waley がそれぞれ “he saw the first Prince”, “he did indeed sometimes see the Kokiden's son, the first-born prince”. と天皇が第一子を見るところを mental process の Cognition type で表現しているのが Seidensticker は mental process を使わず, relational process で “he was with his eldest” としている。この場合 Seidensticker は特定の mental process である “seeing” よりも天皇が第一子と一緒にいるという状況を重視して翻訳をしたのだと考えられる。

またここでは末松と Waley はそれぞれ “who could not refrain from thinking of the younger one”, “this only made him long the more to see the dead lady's child” とやはり mental process を使用しているのに Seidensticker はここでもまた “The Emperor's thoughts” を Carrier として relational process を使用している。

4.2.4 Verbal Process

この process においては Quoted と Reported の使い方に差異が認められた。ここでは Waley だけが ‘A Quoted within Quoted’⁵⁾すなわち Quoted の中に更に Quoted を入れるという形を用いている。Ex. 35, Ex. 36, Ex. 37 は同一の場面からそれぞれの英語訳を抜き出したものである。

Ex. 35 (Waley's translation)

“For a while I / searched / in the darkness of my mind, groping for / an exit from my dream /
 BEHAVIOR P: BEHAV P: MEN: AFF PHENOMENON

QUOTED

QUOTED

; but after long pondering / I / can find / no way / to wake / There is
 P: BEHAV SENSER P: MEN: PER P: BEHAV P: EXIS: ENTITY
 PHENOMENON

none here to counsel / me / Will / you / not come / to me secretly?
 P: VERB RECEIVER P: MAT ACTOR
 EXIS: ENTITY P: MAT

Ex. 36 (Suematsu's translation)

"The Emperor" / commanded / me / to say / that for some time he / had wandered
 INITIATOR SAYER P: VERB ACTOR P: MAT
 P: VERB REPORTED 1

QUOTED

in his fancy, and imagined / he / was / hut in a dream ;// and
 P: MEN: COG CARRIER P: REL: CIR ATTRIBUTE
 PHENOMENON

that, though he / was / no more tranquil / he / could not find / that
 CARRIER P: REL: INT ATTRIBUTE SENSER P: MEN: COG PHENOMENON
 REPORTED 2

Ex. 37 (Seidensticker's translation)

"He" / had said / that for a time it all / seemed / as if he / were wandering
 SAYER P: VERB CARRIER P: REL: INT ACTOR P: MAT
 REPORTED 1 ATTRIBUTE

QUOTED

in a nightmare, and then when his agitation / subsided / he / came to see
 ACTOR P: MAT SENSER P: MEN: COG
 REPORTED 2

that the nightmare / would not end ;//
 ACTOR P: MAT
 PHENOMENON

これは天皇からの使者である命婦が桐壺の母に天皇からの仰せごとを伝える場面である。末松と Seidensticker は間接的な Reported を用いているので、命婦が自らの言葉で天皇からの言葉を間接的に伝えている感を与えるが、Waley の場合はそのまま天皇の言葉となっているので、まるで命婦が天皇からの言葉をそのまま述べているか、または天皇からの手紙をそのまま読んでいるかのような感がある。

つぎに和歌の訳し方についても Waley についてのみ見られる差異がある。それは末松と Seidensticker が物語中の和歌を必ず Quoted の形で訳出している

のに対して Waley は和歌の訳に必ずしも Quoted を使用するとは限らないということである。次の Ex. 38, Ex. 39, Ex. 40 はそれぞれ同一の和歌の英語訳である。

Ex. 38 (Waley's translation)

All this/ together with a poem in which she/ compared/ her grandchild/ to
CARRIER ASSIGNER P: REL: INT TOKEN

a flower which/ has lost/ the tree that/ sheltered/ it/
CARRIER P: REL: POS ACTOR P: MAT GOAL

ATTRIBUTE

VALUE

from the great winds/ was/ so wild/ and so ill-writ as only
P: REL: INT ATTRIBUTE 1 ATTRIBUTE 2

to be suffered/ from the hand of one whose sorrow/ was as yet unhealed/
P: MEN: AFF GOAL P: MAT

Ex. 39 (Suematsu's translation)

She/ proceeded to say/ that his condescension/ made her/ feel/
SAYER P: VERB INDUCER SENSER

P: MEN: AFF

REPORTED

at liberty to offer/ to him/ the following:/
P: VERB RECEIVER VERBIAGE

PHENOMENON

"Since now no fostering love/ is found/
PHENOMENON P: MEN: PER

QUOTED

And the Hagi tree/ is/ dead and sere/
CARRIER P: REL: INT ATTRIBUTE

The motherless/ lies/ on the ground/
CARRIER P: REL: CIR ATTRIBUTE

Helpless and weak, no shelter near."/

Ex. 40 (Seidensticker's translation)

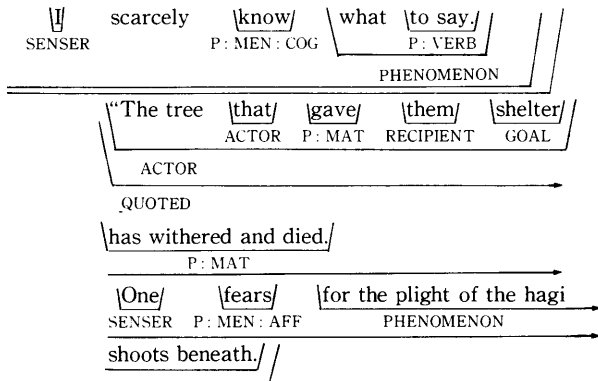
I/ am so awed by/ this august message/ that I/ would run away and hide/
SENSER P: MEN: AFF PHENOMENON ACTOR P: MAT

QUOTED

and so violent are/ the emotions it/ gives rise to/ that
P: REL: INT ACTOR P: MAT

CARRIER

ATTRIBUTE



これらの例では末松と Seidensticker は和歌を独立した Quoted で表現しているのに対し、Waley はこれを Quoted にはせず、関係代名詞の which 以下の節でその意味を伝えている。このような和歌に対する扱いの違いは、おそらく翻訳者の和歌に対する考え方の違いを示しているのではないだろうか。末松と Seidensticker は和歌が物語の中で重要な位置を占めるので、単なる字義だけでなく和歌の持つ美的側面や微妙なニュアンスを訳そうとしたのではないだろうか。一方、Waley は和歌の意味のみを伝えようと試みているように思える。しかしながら、反対の考え方をすれば Waley は和歌の持つ繊細さを熟知していたがために、自信をもって訳せる歌以外はあえて Quoted の形で訳さなかったのではないかという推測も可能であろう。

4.2.5 Behavioural Process

先にも述べたように behavioural process に関する差異は Waley がこの process を他の二人の翻訳者に比べてより多く使用していることである。これは末松と Seidensticker が Emperor に対して material process やその他の process を使用している場面に Waley が behavioural process を使用しているためである。次の Table 7 は Behavior の種類と頻度である。統計的な有意差はないが、Waley が Emperor に対して主にこの process を使用していることがこの表からも見てとれる。

Table 7 The varieties and the frequencies of Behavior

	Suematsu	Waley	Seidensticker
Emperor	2	13	7
Kiritsubo	1	3	4
Mother of Kiritsubo	1	7	2
Genji	2	1	1
Myobu	1	0	2
Others	7	8	5
TOTAL	14	32	21

次の Ex. 41, Ex. 42, Ex. 43 の3例は同一の場面の英訳であるが, Seidensticker と末松がそれぞれ relational process, と material process を使っている箇所を, Waley が behavioural process で表現している場合を例示したものである。

Ex. 41 (Waley's translation)

He / tried to sleep / but / felt / stiffed / and / could not close / his eyes /
 BEHAVER P: BEHAV P: MEN: AFF ATTRIBUTE P: MAT GOAL

Ex. 42 (Suematsu's translation)

To the Emperor the night / now / became / black / with gloom.
 CARRIER P: REL: INT ATTRIBUTE

Ex. 43 (Seidensticker's translation)

He / passed / a sleepless night /
 ACTOR P: MAT GOAL

4.2.6 Existential Process

この process では Participant の Entity と Event の使い方に関して差異が認められる。次の Table 8 は Entity と Event の頻度を示したものである。

Table 8 The frequencies of Entity and Event

	Suematsu	Waley	Seidensticker	$X^2 (\phi = 2)$
Entity	12	13	12	$X^2 = 1.36$
Event	11	13	23	$X^2 = 2.01$
TOTAL	23	26	35	

Table 8 では何も統計的な有意差は認められない。Entity の頻度は 3 者とも殆ど変わらないものの、Seidensticker の Event の頻度が他の二人のものに比べるとやや突出しているのに気づく。末松と Waley は Entity と Event の割合がおおよそ一対一であるのに対して、Seidensticker の場合は Entity と Event の割合が一対二になっている。これは末松や Waley が他の process を使用していたり、または全く表現していない箇所に Seidensticker が existential process を使用していることによる。次の Ex. 44, Ex. 45, Ex. 46 は桐壺の母がいかに娘の桐壺に対して出来る限りのことをしたかを述べた場面である。Seidensticker は “Yet there was a limit to what she could do”, と Existential process を使用しているが、他の二人にはそれに相当する箇所がない。

Ex. 44 (Seidensticker's translation)

Her mother, an old-fashioned lady of good lineage/ was determined/
SENSER P: MEN: COG

that matters/ be/ no different/ for her than for ladies who/
CARRIER P: REL: INT ATTRIBUTE ACTOR

PHENOMENON

with paternal support were making/ careers/ at court./ The mother/ was/
P: MAT GOAL CARRIER P: REL: INT

attentive to the smallest detail of etiquette and deportment./ Yet there
ATTRIBUTE

was/ a limit to what she/ could do./
P: EXIS: EVENT ACTOR P: MAT

EXIS: EVENT

Ex. 45 (Suematsu's translation)

; but her mother/ being/ a woman of good sense,/ gave/ her/
ACTOR P: REL: INT ATTRIBUTE P: MAT RECIPIENT

every possible guidance in the due performance of Court ceremony,/ so that in this respect
GOAL

she/ seemed/ but little different from those whose fathers and mothers/
CARRIER P: REL: INT CARRIER

ATTRIBUTE

were/ still alive to bring/ them/ before public notice./ yet, nevertheless,
P: REL: INT P: MAT GOAL

ATTRIBUTE

her friendliness/ made her/ oftentimes feel/ very different from the want of/
INDUCER SENSER ATTRIBUTE

P: MEN: AFF

ず第一に Transitivity system における他の要素である Circumstantial element に関しても分析を行わなければならない。Process のみならず, Circumstantial element の使用法に差異が認められる可能性があると考えられる。

第二に他の二つの Metafunctions の観点から分析を行わなければならない。すなわち Interpersonal metafunction と Textual metafunction の観点から, この3つの英語訳の Thematic structure, ならびに Mood elements を考慮しなければ, このデータを Systemic-functional Grammar の枠組で分析したとは完全に言えないと思われる。

第三は翻訳に関する理論を取り入れて分析をすることである。このような分析の結果から得られた知見を翻訳理論, さらには翻訳された時代の英語のスタイル, 翻訳者の『源氏物語』に対する考え方などを総合的に考慮しながらこれらの英語訳がどのように作り上げられてきたかを再考しなければならない。

そして究極的には英語のネイティブスピーカーがこれらの異なった英語訳を読んでどのように感じるのか, 換言すれば言語学的観点から記述された異なった英語訳がどのような文学的効果及び価値を生み出すのかを調べなければならないだろう。これらの残された課題に対する解答が見いだせてこそはじめてこの3種類の英語訳の差異を記述したと言えるであろうし, また同時に, 本研究が単なるテキスト分析研究から Brown and Yule (1983) の定義する談話分析や de Beaugrande (1981) の定義するテキスト言語学的研究としても意味を持つようになるであろう。

註

- 1) 本論文は国際基督教大学大学院修士論文 “On the Ideational Differences among the Three English Translations of *The Tale of Genji* in Terms of Transitivity in the Systemic-functional Grammar” を加筆・修正したものである。
- 2) 『源氏物語』の英語以外の外国語訳は次のとおり。
Siefert, R. (trans.)
1978 *Le dit du Genji*, Paris: Publications Orientalistes de France
Benl, O. (trans.)
1966 *Die Geschichte vom Prinzen Genji*, Zurich: Manesse Verlag
Lin Wen-Yueh (trans.)
1982 *Yuan-shih wu-yu*, Taipei: Chung waiwenhsueh yueh-kan she
- 3) 本研究で使用したデータは以下のとおり。
(1) Suematsu, Kencho
1974 *Genji Monogatari*, first Tuttle edition, Tokyo: Charles E. Tuttle

(2) Waley, Arthur

1970 *The Tale of Genji*, first Tuttle edition, Tokyo: Charles E. Tuttle

(3) Seidensticker, Edward G.,

1978 *The Tale of Genji*, first Tuttle edition, Tokyo: Charles E. Tuttle

4) 例で用いられる省略記号とその意味は次のとおり。

P: MAT—PROCESS: MATERIAL

P: MEN: AFF—PROCESS: MENTAL: AFFECTION

P: MEN: PER—PROCESS: MENTAL: PERCEPTION

P: MEN: COG—PROCESS: MENTAL: COGNITION

P: REL: INT—PROCESS: RELATIONAL: INTENSIVE

P: REL: POS—PROCESS: RELATIONAL: POSSESSIVE

P: REL: CIR—PROCESS: RELATIONAL: CIRCUMSTANTIAL

P: EXIS: ENTITY—PROCESS: EXISTENTIAL: ENTITY

P: EXIS: EVENT—PROCESS: EXISTENTIAL: EVENT

P: VERB—PROCESS: VERBAL

P: BEHAV—PROCESS: BEHAVIOURAL

Id: TOKEN—Identified: TOKEN

Id: VALUE—Identifier: VALUE

5) この用語はここで著者が便宜的に定義したものであり、特に用語として確定しているものではない。